

神は細部に宿る

小林 隆 児

God Dwells in the Detail

Ryuji Kobayashi

今年（2012）4月に人間科学部に着任しました小林と申します。社会福祉学科に所属していますが、精神科医でもあります。1975（昭50）年から大学で教育に従事するとともに、精神科医として精神科臨床に従事してきました。主な対象は子どもとその両親で、発達障碍とりわけ自閉症といわれるものを主な研究対象としてきました。私はクリスチャンではありませんが、このたびチャペル講話で何かを話すようにと言われましたので、少しでもキリスト教とのつながりをもつものを、と考えて思いついたのがこのテーマです。

*

この「神は細部に宿る」ということばを有名にしたのは、19世紀から20世紀前半に活躍したイコンの鑑定専門家であるアビ・ヴァールブルグ（1866-1929）だと言われています。彼がイコンの描かれた時代や作者、あるいは真贋を鑑定する場合、服装や髪、指、爪などの細部を見ることの重要性を主張する時に、この言葉をモットーとしたそうです。

ただ、このようなことを最初に主張した人はさらに昔に遡るといわれています。19世紀の後半の1870年代、イタリア人のジョヴァンニ・モレッリという鑑定専門家によって同じようなことが言われていたとのこと。彼によれば、絵画の真贋の判定には、人目を惹く特徴、模倣しやすい特徴ではなく、もともと見過ごしやすい細部、例えば耳たぶ、まぶた、爪、手足の指などを検討することが必要であると説いていたそうです（谷川渥著『芸術をめぐる言葉』美術出版社、2000、pp141-149より）。

*

このような主張は、シャーロック・ホームズの推理法とも似ているといわれていますが、心理療法（面接）における患者（クライアント）の心理を理解する上でも同じようなことがいわれています。服装、アクセサリー、髪型、態度、表情などのちょっとした変化は勿論のこと、ことばの声の調子、抑揚、強弱の変化や響き具合などの変化を見過ごさないことが大切だというわけです。服装や髪型などは一般的にもよく言われることで誰でも日頃から気付いていることだと思のですが、このようにこれまでいわれてきたそうした変化を捉えることはもちろん大切なのですが、特に私が大切だと思っているのは、ことばの声の調子の変化のみならず、身体の動きや変化などを、面接者との関係の中での変化として捉えることが何よりも大切であるということ、私は今日お話ししたいと思います。

*

面接で相手を理解しようとする際に、ややもすれば、相手の話の内容に注意が引きつけられやすいものです。とくに、その話の内容が非常に面接者の興味をそそるようなものであればあるほど、その魔力にとらわれがちになります。その最たるものが、昨今話題となっている解離を示す患者ですね。幼少期に虐待経験をもつ人に多いと言われていますが、その代表的なものが多重人格障碍ですね。突然ある人格から別の人格になって、声色も顔つきも別人ようになります。そのような変化を面接場面で目の当たりにすると、大変ドラマチックですから、面接者はその変化に捕われてしまうのも頷けます。しかし、そうなってしまうと、患者の病理に巻き込まれてしまい、治療にならないのですね。

面接で大切なことは「何を語っているか」ではなく、「いかに語っているか」ということなんです。心の動きは、ことばそのものよりも、その語り方に表れるものなんです。では語り方に注目するとしても、それがなぜ大切なのか、ということが問題となります。たとえ注目したとしても、どこにどのような意味を見出し、それを治療に活かすか、ということが重要だからです。

*

ひとつ、わかりやすい例を取り上げてお話ししましょう。大人になった自閉症

の男性で激しい破壊的な行動が目立つ人でした。その人が施設内で始終うなり声を上げてうろついているのですね。私はその声を聞いていて、不思議に思っただけです。激しい感情を声に出したいようなのですが、口元はしっかり締めているのです。口を開ければすっきりと出せるのですが、どうもそれができないのです。自分の感情を出したい強い気持ちがあるけれども、それと同時に出したくないという気持ちもあるのだと私は思ったのです。そこに私は自閉症の人たちが周囲の人たちに見せている複雑な気持ちの動きを感じ取ることができたのです。それは、相手（人）に近づきたい、けれども近づくのは怖いという心理とっていいものだと思うのです。これを精神医学の世界ではアンビヴァレンスといいます。愛と憎しみ、のように相反する気持ちを一人の人が同時に併せ持つ心理を指しています。私たちにも同じような心理は多少なりともありますが、自閉症の人たちにはそれがあまりにも強すぎて、人間関係が取り結べないのです。そのような難しさが乳児期から認められるのです。この場合、うなり声でことばになっていなかったために、かえって私は声の出し方に注目することができたということもできるのです。ここで大切なことは、その人の声の出し方に、対人関係におけるその人の接し方が現れていることなのです。関係の取り方に独特なものがある、そこに注目することが大切なのです。

*

ついで、幼児の例を取り上げてみましょう。私が治療を手がけた母子例です。子どもは4歳でした。子どもは先にも言いましたように、母親に対してどうも相手をしてほしいようなのですが、いざ近づくと緊張が高まってすぐに遠ざかっていくんですね。その傾向がとても強かったのです。そこで私はお母さんにそのことを説明して、子どもの気持ちが出やすいように、こちらからあまり積極的に働きかけることはせず、見守るような態度で接していきましょうと、助言しました。しばらくすると、次第に子どもは母親におそろおそろですが、近づいて、さりげなく母親の身体を触るまでになっていったのです。いわば甘えるようになっていったのです。私はいい傾向だと喜んでみていたのです。その後まもなく、ある治療場面でこんなことがあったのです。私が

母親と話していて、子どもはほったらかしになっていた。子どもは私たちの間に入りたくて、突然静座している母親の股の間に頭を突っ込んできたんですね。私はすぐに気付いたんですね。甘えたくなくてこんなことをしたんだとね。するとお母さんはどのような反応をしたと思います。私は子どもを引き寄せてしっかりと抱いてくれることを期待し、予想していたんですね。でもそうしなかったんです。すぐにそばにある玩具の方を指さして、「〇〇ちゃん、面白い物があるよ。ほらやってみてごらん」と、他の玩具に注意を引きつけようとしたんですね。私は気になったものだから、すぐにお母さんに言ったんですね。「お母さん、今何をした?」「なぜそうしたんでしょうね」と、先ほどの反応を振り返ってもらったんです。すると、お母さんはすぐに気付いたんですね。おそらくお母さんの心の中に、甘えることはよくないことだという思いが強かったんですね。だからそのような反応をしてしまったんですね。お母さんはそのことに気付くことができたんですが、その後すぐに自分の小さい頃のことを思い出して次のような話をしてくれたんですね。「私は家族でよく旅行に行ったけど、いつも楽しくなかった。まるで合宿のようだった。父親がスケジュール通りに進行することばかりを気にして、私たちはせかされて動かされていたから」と語ったんですね。とても親に甘えられるような関係ではなかったんですね。

このお母さんが子どもに対して瞬間的に思わず反応した言動に、お母さんの子どもに対する対人関係の取り方の基本的なスタンスがとてもよく示されていたわけです。先の成人の自閉症の人のうなり声にも対人的構えが反映していたのですが、同じことがここにも示されているとっていいと思うのですね。

*

このような捉え方は、長い面接の中のほんの一瞬のことなんですね。それをその場ですぐ感じ取って、すぐさまそれを取り上げ、一緒に考えていく。こんなことが心理療法において大切だと私は思っています。どうしてこのようなことが可能になるかといえば、彼の声の響きが私の心にどのように響いているか、お母さんの子どもに対する心の動きがことばにどのように反映しているか、そのようなことを私は自分の身体を通して感じ取っているんですね。だか

ら、瞬時にそれを感じ取って返すことが可能になるんですね。

このように親子に関わっていると、突然このようなことが起こるんですね。その瞬間を素早く感じ取り、それを取り上げ、一緒に考えていく。すると、人間は気付きやすいんですね。身体の動きには嘘はないのですよ。それは幼少期、乳児期のことばが生まれる以前の記憶だからなんですね。今と幼少期がこのようにしてお母さんの心の中で繋がって理解されるようになる。すると、母子ともに劇的に変化していくんですね。自分が日頃意識することなく過ごしていた身体の記憶を呼び覚ますことによって、人間は過去と今とを繋げて理解することができるようになる。このような自己理解、内省することのできる力が生まれると、親子関係は変わっていくんですね。

ただし、私が本日お話したことで最も大切なことは、そのような変化を何のために役立てるか、何に活かすためにそのようなことを感知しようとするか、ということなのです。つまりは、精神科医、臨床心理士、あるいはソーシャルワーカーなどどんな職種の方々でも常に対人援助という仕事をしているわけですから、相手の心理を掴むことは常に求められることなのですね。その際、自分が対人援助をする際に、どのような他者理解を行うことが援助の際の要として大切なことなのか、そうした自分なりの理論を持たなければなりません。他人から言われたから大切なのだと思い込むのではなく、自分にとって他者理解を行う際に、どのようなことが大切なのか、それがなぜ大切なのかを、自分なりに理解していることが最も大切になるのです。そうしないと、相手の心の動きに余りにも敏感（過敏）になりすぎて、ややもすれば相手の感情の変化に振り回されてしまいかねません。それでは対人援助になりませんね。どしどし構えながら相手のかすかな動きを鋭くキャッチする。そしてそれが相手のどのような心の動きを示しているかを瞬時に感じ取って面接に活かしていくということなんですね。治療者側もその意味を身体に染み付くように経験的に体得していることが実際場面では求められるのです。

ではどうすればよいかといえば、常日頃から誰でもこのような経験を積み重ねているものなんですね。だから、日頃から自分のそうした身体感覚を呼び戻し、感じ分けるように訓練していることが大切になります。つまりは、他者理

解ができるようになるためには、まずは自己理解が先決だと言うことなんですね。自分の心の中に、こんな心の動きがあるのだということを冷めた目で掴むことができるようになる必要があるのですね。それが可能になって初めて、他者理解が深まっていくんですね。

心を病むということは、自分とは関係ない、ある特別な異常な人にもみ起こることだと思っている限りはとても他者理解などできません。大なり小なり口では言えないような、目を背けたくなるような、そんな心が自分にもあるということに気付くものです。そのようなことに目を背けず、しっかりと向き合うことが大切なのです。しかし、ここで一言言っておかなければならないのは、他者理解のためには自己理解が大切だといいましたが、その自己理解を深めるためにはどうしても他者という存在が必要になる。他者の心を通して自分の心に気付く、そのようなことが大切なんですね。このように人間の心というもの、人間という字が表しているように、文字通り人を通してしか理解し合うことができない、そんな存在なんだということなのです。

その意味を理解するためには、相手の話を丁寧に聴くとともに、その人がこれまでどんな人生を歩んできたかについて関心を持つことを忘れてはならない。なぜならその人の何気ない細かな動きの中にどのような意味があるか、その謎を解くためには、その人の生活史を理解していくことが不可欠だからです。

このようなことが心理療法で大切だと私は思っていますが、このことは冒頭にお話した「神は細部に宿る」ということと類似はしていますが、タイトルを付け直すと、「神は瞬時に宿る」とした方がよいのではないかと、今になって考えているところです。ご清聴ありがとうございました。

本稿は、西南学院大学チャペル講話（2012.10.2.）で同じタイトルのもとに語られた内容を一部加筆修正したものです。このような貴重な機会を与えていただいた西南学院大学宗教部に厚くお礼申し上げます。